

父親像の変遷に関する研究

——育児雑誌の分析——

石川 洋子・大塚 明子

I はじめに

父親の権威失墜や父権喪失、父親不在などが言われて久しい。家庭教育の低下も叫ばれている今日、家庭の中での心理的父親不在が子どものトラブルの何らかの誘因となるのであれば、子育ての中での父親の持つ意味を探ることは意義があろう。

父親とは一体何かといった、精神分析的な分析、ユング心理学的視点などから、その根元的な意味を探ることは必要である。しかし一方、日本という独特な歴史と風土、日本人の持つ心理的傾向も父親像を語る上では考慮しなければならない。

そしてそれらは、時代の流れや価値観の変遷の中で、変わっていく部分もあるであろう。変化する部分と変化しにくい部分を分けて考え、また統合していく作業も必要と思われる。

現代は明確な父親像が描きにくい時代でもあるが、この変化している部分としての父親を育児雑誌における父親像の変遷として見ることにより、その様相とこれからの父親の行方を探っていきたい。

II 研究の方法

本共同研究は、「主婦の友」に見る家族観や親子観の研究（戦前期の『主婦の友』における母の役割と子供観、1996年文教大学女子短期大学部研究紀要）に引き続くものである。「主婦の友」等の雑誌により、家族や家庭生活に関する一般向けの情報が浸透していく中で、子育てに関するもののみを取り上げた、

いわゆる育児としつけに関する専門誌は、1969年10月創刊の月刊誌「ベビーエイジ」（婦人生活社）から始まる。

子育ての情報を雑誌により提供するということがここから広まり、その後現在に至るまで多くの育児雑誌が発刊されている。

雑誌の記事は、編集者の意図や、取材対象者、記事の投稿者の個人的な意見に依る所は大きい、その時代の影響は多分に受けており、またそれが世論に与える影響も大であると思われる。

本研究ではこれらの雑誌の記事を「父親像」に焦点を当て分析することで、その流れを探っていききたい。

尚「ベビーエイジ」は、子どもの対象年齢と編集の意図もあってか、著名人の父親としての随想やコラムは多いが、父親像や父親論を取り上げた特集記事はあまり見られない。

またその他の雑誌で、創刊が1980年代、90年代のものは、父親に関する記事も多く掲載されているものがあるが、歴史的な流れを探るという目的から、1973年11月創刊の月刊誌「わたしの赤ちゃん」（主婦の友社）の分析を中心にすすめていきたい。

III 育児雑誌「わたしの赤ちゃん」に見る父親像の変遷について

①1970年代前半（1973年～1975年、昭和48年～50年）

戦後1956年の神武景気の到来とともに、アメリカのマイホームに憧れ、三種の神器（電

気洗濯機、掃除機、冷蔵庫)などをそろえた、家庭生活の豊かさが志向され始める。

そして1960年代の所得倍増政策による高度経済成長のもとに、父親はモーレツサラリーマンとなり、新三種の神器(カー、クーラー、カラーテレビ)などの消費がもてはやされ、文化的な生活を目指して、マイホーム主義は核家族世帯を中心に広まっていく。しかし一方、モーレツサラリーマン化した父親は家庭不在となり、家族間でのコミュニケーション不足が指摘されるようになる。

1970年代は、戦後生まれの団塊世代が結婚適齢期を迎え、それまでのマイホーム主義への反省から、ニューファミリーの名のもとに新たな家族の在り方を求めようとした時代である。しかし一方個人主義も高まり、女性の自立も模索され始めてくる時代でもあった。

1970年代の一般的な育児の潮流を見ると、ニューファミリー世代が、新しい家族観の模索と共に、1966年初版の「スポック博士の育児書」(暮しの手帳社)のようなアメリカの合理的、理論的な育児が志向されていた時代である。新しい育児観のもとに、理論的な育児を実践した人々も多かったものと思われる。またベビーフードなど新しい育児製品が入った時代でもある。

この時期の1973年から75年までの父親に関する記事を見ると、随想記事としては、遠藤周作氏の「ぼくの愛情診断」や小松方正氏「甘い甘い親父の記」の連載物などがある。これらは、夫婦観や子育て観を筆者らの父親としての目を通して書かれたものである。

その他父親像そのものに焦点を当てた記事はあまり多くはないが、いくつかの特徴が見られる。

1970年代は、新しい家族の姿が志向されたにもかかわらず、父親は家庭不在となっており、父親像が見えにくくなってしまった時代であるが、70年代前半の記事を見ると、この

不在となった父親像を理論的に探ろうとするものが見られる。ニューファミリーの登場から、家族の平等感や女性の自立志向が強まり、従来の強い父権主義が通用しなくなり、見えにくくなった父親像や父親の権威を何とか取り戻そうとしているようである。

例えば掲載記事の内容を見ると、「男の育児は趣味的」であり、「やっぱり女房には家にいてもらいたい」と思い、「父権をどうやって確立するか」がテーマとなっている。そして、「父親が家族の中心となっているという感じがしない」と嘆かれ、「一回思い切りたたくと父親に対する畏怖の念が起こり」、「愛情と同時に畏れさせることが必要」とされている。「父親なんて虚像」「父親の権威は失墜せざるをえない」という意見もあるものの、多くは父親の権威や復権を訴える記事である。

一方、女性の側からの意見では、ニューファミリーなどと平等主義に基づいた家族観がでてきたものの、「本質的な部分ではほとんど変わっていない」と、性役割分業が依然として残っていることへの痛烈な批判も見られた。以下は、掲載記事の内容をまとめたものである。

○「男の育児は趣味的」

○「父権をどうやって確立するか—子どもにできないことをやれることを示す」

○「父親なんて虚像」

(以上1974年8月『“父親”となるためのこのひたむきな努力』対談記事)

○「一回思い切りたたくと・・・父親に対する畏怖の念が起こる」

○「愛情と同時に畏れさせることも必要」

○「今の住宅事情では父親の権威は失墜せざるをえない」

(以上1975年2月『わが子よ、未来のとびらは自分で開け』座談会より)

○「やっぱり女房には家にいてもらいたい」

○「(共働きは) そばにいないことからくる小さいころのデメリットはあるかもしれない。」

○「(保育園への) 送り届けは僕が全部・・赤い乳母車コトコト押して・・友人に話したら女房に逃げられた亭主だと思われてるぞと言われて・・」

○「共働きやめたら縦の物を横にもせんゾとよく女房に言います」

(以上1975年5月『夫婦ともに働くことの意味を大事にしたい』共働きパパの座談会より)

○「父親が最初に家族の中心に立っているという気がしない」

○「父親らしくふるまわなければならないという自覚に乏しい」

○「父親の物わりの良さの裏には多くの場合、自分ひとりで責任を負いたくないという気持ちがかくされている」

○「ニューファミリーといっても本質的な部分ではほとんど変わっていない・・性による分業が厳然として残っている」

○「夫が妻に期待するのは対等の立場ではなく、子どもの母親役、自分の母親役だ」
(以上1975年10月『若い父親のここが気になる』エッセーより)

「 」内は記事の引用

②1970年代後半(1976年～1979年、昭和51年～54年)

その後1976年頃より、父親の権威を追求しようという記事に少々変化が出てくる。根上淳氏等の父親としての連載物は以前と同様にあるものの、父親像を論じたものは少なくなり、その内容も子育ての喜びや人間としての父親を見せようというように、権威追求から子育てを楽しもうというものになってしまう。

そして父親論ではなく、「パパの育児」といったタイトルで、父親の子育てを実践面から

写真や行動を通して伝えようとするものが見られるようになる特徴がある。

若い父親が家庭にしようとするようになり、父親の権威を論じるよりも、具体的に家庭で何をするのか示してほしいという要望が強くなったのであろうか。現実には子育てをする父親はまだ少数派であり、家庭差も大きいものであったろうが、母親たちから実際に育児をする父親の姿は支持され、またそれが実際に志向されるようになったのであろう。

また1978年より、アンケート形式で、特定の人の意見を取り上げるのではなく、一般の人々の多数意見を探ろうという意図が出てくる。ニューファミリーの定着とともに、父親論という理論ではなく、実生活の中で一般の人々はどう考え、どう行動しているのかという視点で見つめようとし始める時代と言えよう。

以下は、掲載記事の内容を、＜父親像に関する記事＞、＜父親の育児行動の紹介記事＞、＜アンケート等による多数意見の紹介記事＞の3つに分類したものである。

＜父親像に関する記事＞

○「子どもを育てることの意味や妻の大変さがわかってきたように思う」

(1976年2月『お父さんも参加する私設共同保育所』)

○「(育児) こんなおもしろいこと、人にまかせられるか」

(1976年5月『女たちよ！子育てはもっと楽しくやろう』対談)

○「人間としての父親、つまり父の自由化は戦後のこと・・生き様を見せる」

○夫としての“胎教”心得10ヵ条

○“パパ育児”の喜びと悲しみと

(1976年6月『“父親”その理想像へのアプローチ』対談他)

○「人を育てるということは、男にとって

はいわば疎外されている仕事・・・男も女も養育するほうがよいということになれば社会もだんだん変わるだろう・・・（父親は）子どもの要求に反応できる能力は母親になんら劣らない」

（1976年8月『現代アメリカに見る父親の育児参加』）

- 「高い次元で子どもを見てやっているという自覚はほしいな」

（1977年1月『わが子よ、ジャガイモのように芽を伸ばせ』）

- 「親が生きている真実の姿を子どもに見せるべき」

（1977年6月『父親のあり方－いま、もっと考えよう』）

- まず父親、食卓にありてこそ

（1978年2月『食卓こそ父と子の交流の場』）

- 「お父さんの担当は脳の発達を促す部門、探求心を育て、遊びを・・・」

（1979年2月『明日への育児のために親の役割を考えよう』）

- 父親にも保育権を－イギリス便り⑦

（1979年8月）

<父親の育児行動の紹介記事>

- お父さんのリラックス育児①～⑤、おふろ入れ、おむつのとりかえ、調乳と授乳、パパもいっしょの春の外出（育児相談、できたらパパもいっしょに行ってお下さい）、赤ちゃんの清潔など

（1976年1月～5月写真入り）

- おふろはパパでなくちゃ

（1976年2月『パパ育児騒動記』読者の体験談より）

- ボクは主夫です－お料理じょうずのヤングパパのある日

（1977年10月）

- 妻の妊娠、出産に際しての夫の心得10カ条

（1977年10月『広がり！父親教室』）

- 育児とパパの協力

（1977年12月『こうしたらどう？マンガ育児の知恵⑫』）

- 「母親がやっていることをそのまま一部を肩代わりするのではなく、父親ならではの育児参加の意味を見つけてほしい」

（1978年2月『お父さんの育児知識カンどころ31問』）

- 赤ちゃんを抱くのも我流です

（1978年3月『パパの育児学、双子のパパになった“お兄ちゃん”』）

- お父さんがやってあげたい草花、草木遊び

（1978年6月『道草を楽しむパパと赤ちゃんの散歩』）

- 夫の“胎教”心得10カ条

（1978年7月）

- パパの作る離乳食

（1979年3月）

- パパ作って！楽しい水遊びのおもちゃ

（1979年7月）

- 「父の日」に開かれた“プレパパ”のための育児教室

<アンケート等による多数意見の紹介記事>

- わが家のパパの家事・育児協力度は・・・

（1978年5月読者レポートより）

- 女子大生－育児分担を望む、母親－精神的支えを望む

（1979年9月『父親の育児参加』アンケートから）

- ③1980年代（1980年～1989年、昭和55年～平成1年）

1980年代は、産業界の「軽・薄・短・小」の影響が生活、文化全般に影響を及ぼしてくる時代である。そして人間関係でも、浅く薄くつき合う傾向が出てくるようである。その

結果、家族の中では解決しきれない人間関係の問題が大きな問題となって噴出したようである。家庭内暴力、校内暴力などが盛んに紙上をにぎわすようになる。

育児の世界には、紙おむつや抱っこベルトが入ってくる。紙おむつについては反対意見も多かったものの、メーカーサイドの改良もあり、母親たちの利用率が次第に高まってくる。子どもを連れて気軽に外出しやすくなり、子連れの外出が一種のファッション化していく観もする時代である。

1980年代の育児雑誌を見ると、従来と同様に、「おやじです」「親子です」「ズームアップ・ミスターパパ」「親子でハッピータイム」「パパからのメッセージ」「WATA AKA SPECIAL INTERVIEW」というさまざまな人物紹介やイラスト・エッセーなどの連載物があるが、それらも、1970年代後半同様に、父親論を大上段に構えることはなくなっている。

また、共働きの増加とともに、子育てを両親が共にするものという考えも浸透してくる。父親の子育てを「母親のお手伝い」とする論調から、父親は母親の「よきパートナー」といった言い方になる時期でもある。「夫(父親)の育児参加度」という言葉が頻繁に使われ、育児参加は当然とした上で、その程度を話題にした記事も多い。

さらに、実生活上どうすればより楽しいか、どう遊べばよいかといったことに、より以上に焦点が合わせられるようになる。

<父親像に関する記事>

○赤ちゃんのためにお父さんは何ができる
(1981年6月『父親たちの父親論』)

○育児の大切な時間をパパにもっと体験してほしい

(1981年11月『もし、パパに育児休暇があるとしたら』)

○(父親の)最初の役割は母親のサポート
(1983年6月『父親の役割って何だう一育児・家事積極参加派のパパ、不参加派のパパ座談会』)

○おもちゃは親子のコミュニケーション
(1984年5月『父親にとって娘はひたすらかわいいですね』)

○家事じゃうず、育児じゃうずなパパを育てるには
(1984年8月対談より)

○夫は精神的な支えと育児のよきパートナー

(1986年9月『妊娠・出産、そして子育て時期、頼りにした人、している人は?』)

○何もしないパパもほんとうは参加している!?

(1988年7月『パパの育児参加、わが家の場合』)

<父親の育児行動の紹介記事>

○パパは遊びのアイディアマン
(1980年5月『パパと遊ぶのーいすき!』)

○パパ、ママ、動物園へ連れてって!
(1981年5月、写真入り記事)

○ちょっと拝見、パパといっしょのおふろタイム
(1982年8月)

○パパの力を引き出す10のコツ
(1986年12月)

○お正月はパパといっしょにお部屋遊び
(1987年1月)

○きょうは1日、思いっきり遊ぼうよーパパ、ママ、赤ちゃん、みんなで運動会
(1987年10月)

○向坂さんちの子育てナイスデー①～⑩
(1987年8月～89年2月写真入りで連載)

○目ざせ子育て完投勝利! ①～⑫
(1989年1月～12月写真入りで連載)

○入門! パパの育児塾、第一講～第六講

(1989年1月～6月写真入りで連載)

- 新・パパの育児塾，男のたてまえ，父の本音（散歩に行こう！パパの育児参加度など）

(1989年7月～12月)

- パパと赤ちゃんのコミュニケーション

- 新之介くんのハワイ旅行

(1989年5月赤ちゃんづれだとホラこんなに楽しい！)

<アンケート等による多数意見の紹介記事>

- あなたの育児協力度はどの程度ですか？

- 育児においてはパパはママのお手伝い

(1980年6月『アンケート80人のパパに質問』)

- パパの育児協力度は？

(1980年8月)

- パパの育児参加度を採点しよう

(1982年9月)

- よその家ではどんなかしらーパパの育児協力

(1985年10月)

- パパ・ママ度，妻・夫度を採点しました

(1986年8月)

- わた赤，読者のパパ，50人に聞きました

(1989年4月)

④1990年代（1990年～1996年，平成2年～平成8年）

1990年代に入ると，子育ては多様化し，また家庭の中だけの子育てからくる密室育児や育児の孤立化という弊害への反省から，子育てをしている母親たちの目も外へ向くようになる。母親の自主的な育児サークルなどが増え，母親たちが外へ出て集い始める時代と言える。

父親論に関しても，母親の側に立った一方的な父親の育児参加の紹介，呼びかけといった記事から，父親の側の意見を聞き，その立

場や事情も考慮しようという記事が多くなる。夫婦が同じ土俵に立って，それぞれの立場を理解しながら子育ても模索していこうという方向であろう。

また育児的な「世話」の部分の行動ばかりでなく，子どもが少し成長した場合のつきあい方，話し方などへ目を向けようとする方向もうかがわれる。新しい潮流と言えよう。

<父親像に関する記事>

- 妻の証言VS夫の言い分，わが家の育児分担事情

(1990年1月～12月)

- 「一つでも二つでもいい！父親も育児や家事に役割を持つのが大事」

(1992年7月『パパの育児，わが家の場合』)

- いばるつもりはありません，でも，僕たちの状況もわかってほしい

(1993年9月『パパの育児参加，僕たちはこう思う』)

- うちの子よその子世界の子 お父さんにとっての子育てって？

(1993年10月)

- お父さんが育児に参加しやすいのはダイナミックな遊びの場面

(1994年5月お父さんとのいい関係どう作られる？)

- 「おごるな女房！オレの育児に口出すな！」

(1995年7月座談会記事)

- お父さんはお母さんと異なりダイナミックな遊び相手をする担当です

(1995年8月『2歳になったらパパとのつきあい方が変わってくる』)

<父親の育児行動の紹介記事>

- 赤ちゃんとお父さんのお留守番ウォッチング

(1993年3月)

- 拝見！パパと赤ちゃんのおふろタイム

(1993年10月)

○新米パパただいま育児フントウ中！

○パパうんちのおむつ、かえてよ！

(1994年3月)

○こわくない、泣かれない、疲れない！ママ&パパでしようずなだっこ研究

(1994年6月)

○おっとほけーサンのリカちゃんとの日々

(1994年6月～1995年11月マンガ写真入り記事)

○パパといっしょの夏休み！目的地別赤ちゃんといっしょのお出かけ知得情報

○離乳食だって、パパにおまかせ！

(1994年7月)

○「育児パパ」養成テク大公開

(1994年9月)

○本日開店!!パパの床屋さん

(1994年10月)

○新米パパの育児な～るほど塾

(1995年1月～12月)

○パパといっしょに大きくなろう、フックン流子育て実況中継

(1995年1月～12月)

○ムッシュ・コートリンのパパというおしごと①～②⑩

(1995年5月～1996年12月)

○パパといっしょの夏休みの過ごし方、極楽メニュー

(1995年7月)

○育児の達人パパ選手権

(1996年10月)

<アンケート等による多数意見の紹介記事>

○パパだって言いたいことがある！

(1996年2月)

○言うに言えない胸の内・・・パパの本音を聞かせてください！

(1996年3月ワーキンママ通信)

○うちのパパはこんな人

(1996年6月)

以上、1973年から1996年までの育児雑誌を分析したが、その流れを概観すると、父親の権威を求め何らかの父親像を探ろうという視点から、実生活の中で具体的にどう行動すればいいのかという視点で父親を見るようになってきたと言えよう。具体的に何をすべきかを考える中から、父親、母親の持つ意味、果たす役割が浮かび上がることも少なくない。実生活を離れての父親論には、人々はついていけないのであろう。

一方子育てとは、心育ての面も大きい。特に子どもの年齢が高くなるにつれて、その難しさは誰しも感じるところである。子どもの場合、それが遊びを通してになることもあるが、親として、子どもの気持ちや心とどう向き合うかという視点は大切である。

どちらかと言えばわかりやすく、納得しやすい育児の「世話」の部分よりも、この親の思うようにはならない子どもの心とどうつき合うかは、浅く薄い人間関係のつきあい方では解決できないことである。これらを父親として、あるいは親としてどうするのかをどう提示していくのかも今後の課題であらう。

Ⅳまとめ

父親像の変遷を探るために、1973年から1996年までの育児雑誌「わたしの赤ちゃん」の父親に関する記事を分析検討した。

1970年代前半では、家庭における父親不在と共に、失われた父親の権威や確固とした父親像を取り戻そうという記事が見られたが、1970年代後半になると、権威追求から家庭人としての実践的な育児参加行動の紹介といった側面の記事が多くなる。またアンケート形式により、特定の人の意見や育児行動のみではなく、一般人々の意見や動向を探ろうとす

る動きが出てくる。

1980年代に入ってもこの傾向は続き、父親の育児参加は当然という意識のもとに、写真入りあるいはマンガを含めて父親のさまざまな育児行動が紹介されている。

1990年代になると、父親の育児参加の紹介記事は依然として多いものの、父親の立場も考慮しようという傾向も見られるようになる。また遊びなどを通して、子どもの年齢が高くなった時のつきあい方を探ろうという方向も見い出せた。今後、この子育ての側面を父親としてあるいは親としてどう関わるのかということが重視されるべきではないかと思われる。

<引用文献>

「わたしの赤ちゃん」(株)主婦の友社
1973年～1996年

<参考文献>

「男になれない息子たち」ギー・コルソー
TBSブリタニカ 1995年
「子どもの成長と父親」岡田康伸編
朱鷺書房 1989年
「子どもの発達と父親の役割」牧野カツ子
柏木恵子編 ミネルヴァ書房 1996年
「父親学入門」三田誠広 集英社 1995年
「父親の誕生」マーチン・グリーンバーグ
(株)メデイカ出版 1994年
「ファーザーブック」グラド他
メデイサイエンス社 1985年

本研究は、1996年度文教大学女子短期大学部
共同研究費の助成を受けてなされたものである。